HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	Ｙ市の子ども発達支援センターを利用している家族の生活 ： 子育てをめぐる家族内の役割と資源
Author(s)	保田, 真希
Citation	教育福祉研究, 21, 13-35
Issue Date	2016-11-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/64382
Type	departmental bulletin paper
File Information	013-0919-6226-21.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

[Journal of Education and Social Work No.21 2016
教育福祉研究　第 21 号　2016]

Y 市の子ども発達支援センターを利用している家族の生活
―子育てをめぐる家族内の役割と資源―

保　田　真　希

はじめに

本稿の目的は、地方都市で発達に不安を抱える子を育てる家族がどのように家族内で家事や育児などを行っているのか、地域の特徴や地域の社会資源とどのように関係しているのかについて調査結果を整理することである。より具体的には、X 県Y市の子ども発達支援センターを利用している家族に行った聞き取り調査の内容をもとに分析をしていく。子ども発達支援センターは子どもと一緒に保護者も通園する必要がある。そのため、本稿は主に誰が一緒に通っているのか、家事や育児などは家族の中でどのように行っているのか、そこに地域の社会資源やインフォーマルな資源がどのように関わっているのかを検討する。

調査結果を整理していく際に、３つのことに着目する。第１に、地域の社会資源がどのように関わっているのかである。具体的な調査項目は、「子ども発達支援センターや市に対する意見や要望」「子ども発達支援センターの利用」などである。第２に、インフォーマルな資源がどのように関わっているのかである。具体的な項目としては、「仕事」「出身形態」「サポート」「子どもの世話を頼む相手」などである。第３に、本人がもつ意識である。具体的な項目として、「家事や育児などの分担」の結果を整理する。

１．調査の概要

（１）調査の概要

本稿は、科学研究費・基盤Ｂ「地方都市における貧困の世代的再生産の構造と政策的対応に関する実証的研究」（2013～2015 年度、研究代表者：松本伊智朗）によるものである。本調査は、Y市にある子ども発達支援センターを利用している親すべて（47 世帯）を対象とした。子ども発達支援センターを通じて依頼文を配布し、協力を得られた 19 名に対して、個別に半構造化インタビューを行った。調査項目は、大きく４つに分けられる。第１に、本人や家族について（家族構成や出身地、居住、通院や訓練機関の有無、介助が必要な家族の有無、最終学歴や資格、学卒後から現在に至るまでの仕事など）である。第２に、普段の子育てについて（現在に至るまでの家事や育児の役割の配分・変化、サポート、自身や配偶者が子どもを見られない時に頼む相手、子育てについての夫妻間での話す時間、不安や悩み、困っていること・困難を感じること、相談相手、子育て情報の入手など）である。第３に、子ども発達支援センターの利用について（通っている子どもの数・期間、通うきっかけ、主に一緒に通っている人、通う手段・時間、主に通っている人がいけない場合の対応、通ったことでの変化（子にとって・母にとって）、通って良かったと思うこと・通うことでの大変さ、療育時間・利用回数、職員との関わり、意見や要望など）である。第４に、現在住んでいる地域について（住んでいる地域の良さ・不便さ、サービス、子ども発達支援センターや市に対する意見や要望など）である。聞き取りの際、録音をせずに、聞き取りの内容を逐語録で記録した。この記録をもとに、以下、結果を整理、分析していく。なお、本稿で扱う事例については、引用文のうしろにケース番号を付して使用する。

（２）倫理的配慮

本調査は、北海道大学大学院教育学研究院にお

ける人間を対象とする研究倫理審査の承認を受けている。また、聞き取りを始める前に、協力者に対して調査の趣旨や概要、データの取り扱い方法などを記載した資料を提示し、資料に沿って口頭で説明し、データの利用に関する同意を得ている。なお、本稿は個人の特定がなされないように秘匿化を行っている。

（3）Y市の特徴

ここでは、Y市内の児童発達支援事業所の数とその対象を整理し、発達に不安を抱える子を育てる場所としてのY市の特徴を示す。Y市には未就学児・就学児童を対象とした児童発達支援事業所が3つある。第1に、Y市とその近隣の4町に住んでいる未就学児を対象としたY市子ども発達支援センターである。第2に、民間企業が運営している未就学児（0歳～5歳）と就学児（6歳～18歳）を対象とした児童発達支援サービス・放課後等デイサービスである。第3に、社会福祉法人が運営している小学生から高校生までを対象とした放課後等デイサービス事業所である。

Y市では、就学前に療育を受けられる場所はY市の子ども発達支援センターのみである。そのため、他に療育を受けたい場合には、その近隣にあるX県の中核市B市の療育センターやX県の政令指令都市まで行く必要がある。

2．調査協力者の基本属性

（1）調査協力者の性別

実際に協力を得て聞き取りを行った19名はすべて女性であった。これは、子ども発達支援センターに子どもと一緒に通っている人が主に母親である場合が多いことによるものである。

（2）家族形態と年齢

「家族形態」については、19名のうち、「父＋母＋子」が16名で最も多く、「母＋子」が2名、「その他」が1名である。各家族の子の数に着目すると、「2人」が11名で最も多く、「3人以上」が5名、「1人」が3名である。

母親の年代は、「30歳代」が16名で最も多く、「40歳代」が2名、「20歳代」が1名である。父親の年代は「30歳代」が12名、「40歳代」が4名、「50歳代」が1名である。

（3）協力者とその配偶者の仕事

ここでは、女性19名（母親）とその配偶者である男性（父親）の現在の仕事を整理する（表1）。母子世帯の2例については、男性の仕事については「不明」と記載した。

表1のように、母親の職業については、「無職・専業主婦」が11名で最も多く、「臨時・パート・アルバイト」が6名、「自営業」が1名、「公務員・団体職員の常勤・正社員」が1名である。「無職・専業主婦」11名のうち、8名が「転入型」（移動タイプについては次節で述べる）である。19名の女性のうち、常勤で働いているのは1名（介護職）のみである。

「臨時・パート・アルバイト」の6名の職種は、「看護師（パート）」が1名、「冬のみ農家でパート」が1名、「飲食店勤務（パート）」が1名、「工房（配食業務・パート）」が1名、「パートの掛け持ち（清掃業と飲食業）」が1名、「工房（パート）」が1名である。この6名のうち、「結婚して専業主婦、子どもが3歳頃に働き始めた」が2名、「子どもを産んでから」が1名、「今の仕事は子どもを産んでから、結婚前も飲食店、妊娠時はヘルパー」が1名である。

「無職・専業主婦」である11名については、「結婚してから専業主婦」が5名で最も多い。次いで、「子どもを産んでから専業主婦」が1名、「子ども

表1　協力者とその配偶者の仕事

	公務員・団体職員等の常勤・正職員	民間企業の常勤・正社員	自営業	無職・専業主婦	臨時・パート・アルバイト	不明
女性	1	0	1	11	6	0
男性	7	9	1	0	0	2

が生まれて退職して専業主婦、子どもが幼稚園の頃に約2年間働いて退職して専業主婦」が1名、「妊娠して退職､一度パートに出るが退職して専業主婦」が1名､「子どもが3歳まで働いていたが退職して専業主婦」が1名､「子どもが3歳の時に働き始めたが、子どものことで1年間で退職し、専業主婦」が1名､「子どもが発達支援センターに通ったばかりで手探りのため、退職したばかり」が1名である。中には､「育休をとっても、子どもを預けるところがどこにも無いと思って、仕事をやめて自分で子どもを見るしかないと思った」事例や「療育に通っている間は仕事ができない」という事例があった。

一方で、父親の仕事については､「公務員(自衛官を含む)」が6名､「教員」が1名､「会社員」が9名､「農家」が1名である。仕事･職種の変化が見られた1名を除いて、男性においては仕事の変化が見られなかった。

以上のように、母子世帯の2例を除いた既婚女性については、男性が主な稼ぎ手としての役割を果たしていた。

(4) 出身形態

子育てなどの生活は、親族が近くにいるのか否か、友人などが周りにいるのかどうかで違ってくることが予想される。そのため、ここでは調査協力者（女性）とその配偶者（男性）の出身を整理する(表2)。母子世帯の2例については、男性の出身は「不明」と記載している。その際、移動タイプを定住型(Y市出身でずっとY市に在住)、Uターン型（Y市出身で、一度市外に出た経験のあるUターン組)、転入型(Y市以外の出身で、Y市に来た）の大きく分けて3つに区分した。

表2に示す通り、男女共に「転入型」が最も多い。協力者である女性は､「転入型」11名のうち、Y市の近隣地域の出身者が5名であり、他の6名もY市からの距離のちがいはあるものの、すべてX県内の市町村出身者であった。「転入型」であっても比較的近くに実家がある人が多い。

表2　調査協力者とその配偶者の出身

	定住型	Uターン型	転入型	不明
女性	4	4	11	0
男性	3	2	12	2

(5) 現在､子ども発達支援センターに通っている子の年齢と性別

現在、子ども発達支援センターに通っている子の年齢は、19名のうち､「5歳」が6名(5名が男性、1名が女性)､「4歳」も6名（男性が5名、女性が1名）で最も多い。次いで､「3歳」が4名(女性が3名、男性が1名)である。それらに次いで､「6歳」が3例（すべて男性）である。今回の協力者の中には、現在、きょうだいで通っている家族はいなかったが、過去に療育を受けたことがある場合や下の子どもを一緒に連れてきて、療育中は職員に他の子を見てもらっている場合があった。

(6) 現在､子ども発達支援センターに通っている子の幼稚園や保育所の利用の有無

現在､「幼稚園」に通っているのは11名で最も多い。次いで､「保育所」に通っているのが3名である。その他に､「4月から幼稚園に通わせる予定」が1名､「幼稚園にいつから通わせるか迷っている」が1名である。今回の調査協力者については､「幼稚園」を利用している人や、利用を考えている人が多い。働いている女性においても、午後に子どもを迎えに行くことができるような働き方をしていた。

(7) 現在､子ども発達支援センターに通っている子の通院や他の訓練機関の利用の有無

現在、子ども発達支援センターに通っている子の通院や他の訓練機関の利用の有無については、「利用している」が14名､「利用していない」が5名である。利用している14名のうち､「B市（X県の中核市）の療育センター」が8名で最も多い。次いで､「Y市市立病院」が5名､「B市の医科大学付属病院」が2名､「Y市児童発達支援･放課後デイサービス」が2名､「B市の聾学校」が1名､「C市（X政令指令都市）の療育センター」が1名

である。また、「利用していない」5名のうち、「B市の療育センターの言語聴覚士に相談をしたい」が1名、「B市の療育センターに通うか迷っている」が1名いた。

（8）手帳の有無

現在、子ども発達支援センターに通っている子ども19名のうち、18名は何も手帳を所持しておらず、1名は「療育手帳A」を所持していた。手帳を所持していない人のなかには、「片耳が難聴で全く聞こえないが、片耳が聞こえているため、障害として認定されなかった」「療育手帳Bなら持っていても、持っていなくても変わらないから」という意見があった。

3．現在の子育てとサポート

（1）家事・育児の役割の分担

普段、食事の支度、子どもの入浴、子どもの着替え、洗濯、掃除、お風呂洗い、ごみ捨て、こどものトイレ、寝かせるなどの家での役割は誰が何をしているのかについて、以下に結果を示していく（表3）。

「家のことはすべて妻」がやっている6名には、主に4つの特徴がある。第1に、夫は仕事が忙しくて帰宅時間が遅いこと、第2に、子どもが母親以外だとダメであること、第3に、ジェンダー規範が強いことである。例えば、夫が結婚前から家のことはしないと言っているケースや女性自身が「男性にはさせたくない」というケースである。第4に、「移動タイプ」と「仕事」をみると、母子世帯の2名を除いた4名全ての夫が「転入型」であり、その4名全ての女性が専業主婦である（その4名の女性の出身は、「転入型」が3名、「定住型」が1名である。「夫の仕事」は公務員が1名、教員が1名、会社員が1名である。また、母子世帯の2名は「Uターン型」と「定住型」であり、2名とも「パート」である）。

「夫はもともと家事をしない人だったけど、仕事が忙しくてできない。夫は結婚する時から、「家のことはしない」と言っていて、「俺に負担をかけるなよ」と言っていた（中略）（Q：子どもが生まれてからは？）子どもが小さい時は夜泣きをしても、横でぐっすり寝ていて起きない。（Q：1人でやるのは大変では？）大変だけど、もともとしない人だから仕方ないかなと」（No.1）

「家のことは全て私がしている。（中略）着替えは、子どもたちが自分でできる。（Q：ごみ捨ても？）男の人にさせるのは嫌だから。（中略）男の人が朝ゴミ袋をもって出て行く姿は格好悪いから、絶対にさせたくない（Q：変化）私が仕事をしている時も変わらない。妊娠中も変わらず、私がやっていた。（Q：どのように決まりましたか？）夫ができないだろうなというのもあるし、自分でやらないと気がすまない（中略）それに、男の人が家のことをしているのもどうかなと」（No.2）

「（Q：変化）子どもを産む前はお風呂掃除やゴミ出しは夫がしてくれていた。子どもを産んだ後は、子どもがいる時は子どもの面倒を見てくれたり、ゴミ出しをしてくれた。私が働き始めて、夫が手伝うのをやめて、全くしなくなり

表3　家事・育児の役割の配分（N＝19）

すべて女性がしている	6
家のことは主に女性（母親）がしているが、男性も協力的	5
家事全般は女性（母親）＋男性（父親）は育児には協力的	3
家事全般は女性（母親）＋男性（父親）はごみ捨てと育児に協力的	3
お風呂洗いのみ男性（父親）で、それ以外はすべて女性（母親）	1
その他：女性（母親）の両親がサポート	1

…（中略）喧嘩になるのが嫌だし、夫に頼るのもやめた。文句を言われるし…働きながら、それをすると体ももたないし、子どもも不安定になって。私がばたばたしていると、子どもにも影響が出て、子どものために仕事をやめた。ご飯とかも出てくるのを待っている夫のために、仕事の合間に夫の弁当の準備をしに家に戻ったり、常に頭の中で効率よく、〜の部屋に行くときには〜もやってみたいに、いくつもやって、子どもも早く寝かせるようにして、昼休憩のときに一度家に戻って、夕飯の支度をしたり、週３日休みだったから、まとめて家事をして、週４日フルに近い状態で働いた。そうしたら、体もおかしいし、子どもも不安定になったから辞めた。」（No.8）

次に、「家のことは主に妻がしているが、夫も協力的」には５名いた。基本的には家事全般・家のこと全てを妻が中心的に行っているが、夫は子どもをお風呂に入れる等の育児やお風呂洗い、食器洗い等を手伝っていた。その中には、休みの日や妻が大変な時には家事や育児を手伝うという傾向があった。移動タイプをみると５名のうち、３名は夫妻ともに「転入型」である。残り２名は夫妻ともに「Uターン型」が１名、妻「転入型」夫「定住型」が１名である。夫妻共に「転入型」である３名のうち、２名は妻が「専業主婦」であり、残り１名は看護師（パート）である。看護師のケースでは、夫妻共に転入型であるが、妻の実家がY市の近隣にあり、サポートを得やすい状況だった。

次に、「家事全般は妻＋夫は育児には協力的」には３名いた。夫は子どもが生まれてから育児に協力するようになった。また、「家のこと＝女性の仕事・役割」という意識が強い。そのなかには、女性自身が「母親の仕事」と捉えている場合やつわりがひどい時も夫は何もせず、家事を疎かにすると夫に怒られた事例もある。

「9：1で私がしている。子どもの歯磨きは夫がやると痛くないみたいで、爪切りや耳かき等の細かいことは夫がしてくれる（Q：役割の変化）子どもが生まれてからやってくれた。（中略）夫に家事は女の仕事だと言われていたけど、（中略）夫の気分を盛り上げて、ようやく9：1の配分になりました。（中略）最近は子どもが言葉を話すから、子どもが言ったら、私が言わなくてもやってくれる。でも、もっとやってほしい（中略）夫は「育メンはなよっちい」と思っている節がある。会社でもそういう風潮があるみたいで、女性は家のことをしてという思いが強い。それが格好いいと思っている。（Q：仕事の変化）妊娠してつわりがひどくて、仕事場にも迷惑をかけていて、周りからも「何しているの？」と言われるし…それで仕事をやめた。１回パートに出たけど、子どもに手がかかるから、やめて、そのまま専業主婦になった。（Q：ご主人のほうは？）変化なし。家事がおろそかになると怒られるし、威嚇された。つわりがひどい時も何もしない。他の母親は何もない、つわりで具合が悪くなることが無いのに、何でお前だけ具合が悪くなるんだ、と言う。夫は自分を犠牲にしてまで、何かをするというタイプではない。」（No.13）

同じく「家事全般は妻＋夫はごみ捨てと育児に協力」には３名いた。夫は家事をしないが、子どもが生まれてから、子どもをお風呂に入れたり、お風呂洗い、ごみ捨てなどに協力的である。「仕事」をみると、女性は「専業主婦」が２名、「農家」が１名である。男性は「自衛官」が１名、「会社員」が２名である。移動タイプについては、女性は「定住型」が２名、「転入型」が１名であり、男性は「転入型」が２名、「定住型」が１名である。

最後に、「お風呂洗いのみ夫で、それ以外は妻」が１名である。移動タイプをみると、妻は「転入型」で夫は「定住型」である。妻の実家はY市の近隣の町であり、親からのサポートがある。また、妻は子どもが生まれた後に短時間労働で働いているが、夫は仕事の帰りが遅いため、家で過ごす時間が長いほうが家での役割を行っていた。特に、

結婚当初から家のことは全て妻が行っており、役割の決め方は家にいるのが長いほうがやることになっていた。

「その他」が１名である。家事全般は妻や妻の母がやっており、お風呂洗いとゴミ捨ては妻の父がやり、夫は「子どもの入浴」は手伝うというものだった。夫は仕事で帰宅しないこともあるため、妻の実家がサポートをしていた。

以上のように、女性が中心的に家事や育児の役割に従事している傾向があった。女性の多くが「専業主婦」であり、働いている場合にも、「パート」などで家の中の役割を果たせる働き方をしていた。家族の中で役割がどのように決まったかについては、主に３つのことが関係していた。第１に、夫妻で働く時間や家にいる時間などの「時間資源」である。夫は仕事が忙しく、帰宅時間が遅いため、家にいる時間が長い女性が行っているというものである。第２に、「家事や育児などは女性の役割・責任」という「性役割意識・規範意識」である。夫に「結婚前から家のことはしない、負担をかけるな」と言われていた事例や夫妻が持つ「男性が働いて、家事や育児は女性の役割」という意識が高く、「育メンは、なよっちい・格好悪い」という男性のもつ意識や女性の「男性にはさせたくない」意識の強さである。第３に、子どもの特性によって規定されていた。

（２）サポート

ここでは、普段の子育てをしている時に、誰からどのようなサポートがあるのかについて述べる。

１）実家からのサポートの有無

「出産から現在に至るまで、ご自身や配偶者の実家からサポートはありますか」という質問に対して得られた回答をまとめていく（表４）。

表４　実家からのサポートの有無

男性の実家 / 女性の実家	サポートあり	サポートなし
サポートあり	11	6
サポートなし	2	0

表４のように、両方の実家からサポートを受けている場合が11名で最も多い。移動タイプをみると、男女ともに転入型が多いが、女性の実家は比較的Ｙ市の近隣にある。妻の実家から受けているサポートは、里帰り出産・同居、保育所などに預けられない時に子どもを見てくれる等の生活全般のサポートである。夫の実家からのサポートは、衣服や食べ物等のプレゼントが多く、夫の実家が近い場合には子どもを見てもらっていた。

「私のほうは実家に住んでいて、サポートあり。（中略）夫の実家からは米、お金、お菓子とか、子どものものとか色々くれる」（No.10）

「私の母が看護師をしているので、子どもが体調を崩して保育所を休まなきゃいけない時に面倒を見てくれる（Q：ご主人の方は？）夫の実家はものを送ってくれる。長期夫がいない時は自分の実家に遊びにいく。子どもは祖父母が大好きだし、自分の実家だから何でもしてもらえるし、ゆっくりできる（中略）実家に帰るとストレス発散もできている」（No.16）

「私の親がやってくれた。一緒に住んでいた時期もあるし、子どもをあずけていた。あとは、お風呂に入れてくれたり、食事を用意してくれたりとか、色々（Q：ご主人の実家からは何かありましたか？）お菓子とか服とかはたまにくれた」（No.18）

「里帰り出産だったから、子どものこともやってもらっていた。夫の親からは物をもらったり、会いに来たり、遊びにいくと服を買ってプレゼントしてくれた」（No.19）

次いで、「男性の実家からのサポートは無いが、女性の実家からはサポートがある」が６名いた。６名については、女性の実家からは生活全般のサポートを受けているが、男性の実家がＹ市の近隣に無い場合や男性の実家とは疎遠で関わりがない

場合、男性の実家に頼ることができない・頼らない事例があった。

「妹に相談をしたり、相談をされたり、週1で電話をしている。妊娠から出産まで、全体を通して、きょうだいの方が多い。私の親には、出張の時、上の子の時は頼んでいた（中略）夫の親とは仲がいいけど、預けられない。心の中ではどう思われているのかわからないから」(No. 2)

「今でも自立支援を頼んでいるけど、月に2、3回しか使えないから、それ以外は私の実家に預けている。(中略)（Q：夫の実家や親族からは？）全然付き合いがなくて、してもらったということはない。付き合いがないから、物をもらったこともない」(No.11)

最後に、「女性の実家からはサポートがないが、男性の実家からはサポートがある」2名いた。男性の実家からは、生活全般のサポートを受けている一方で、女性の実家においては、両親を亡くした事例や実家が近くになく、両親2人とも働いているためサポートが無い状況だった。

「私の親は2人ともいないので、夫の親に手伝ってもらったりする。参観日などの学校行事に参加する時に、下の子を預ける。自分が病院に行く時も預けて、見てもらっている。割と近くだから、頼れる。だんなの母とか弟に見てもらっている。(中略)私は子どもを産んで仕事をやめた。(中略)育休をとっても、自分の両親はいないし、夫の親も働いているから、子どもを預けるところはどこにもないなと思って。それなら、仕事をやめて自分で見るしかないなと思って。療育に通っている間は仕事ができない」(No.17)

2）自身や配偶者が子どもの世話をできない時に子どもの世話を頼む相手

ここでは、「冠婚葬祭などで自身や配偶者が子どもの世話をできない時に誰に子どもを見てもらうのか」について結果を示していく。「自身と配偶者が子どもの世話をできない時に、誰に子どもの世話を頼むのか」について、頼む相手（複数回答）に着目して表5にまとめた。

表5　自身や配偶者が子どもの世話をできない時に頼む相手（複数回答）

自身の親	9
夫の親	5
一緒に連れて行く	5
2人がいないことが無いようにしている	3
自身のきょうだい	2
元夫	1
頼める相手が誰もいない	1
保育所の一時保育	1
子どもが留守番できる	1

以下に、「冠婚葬祭などでご自身や配偶者が子どもの世話をできない時に誰に見てもらいますか」という質問に対して得られた内容を記していく。表5に示したように、19名のうち、「自身の親」が9名で最も多い。次いで、「配偶者の親」が5名、「一緒に連れて行く」が5名である。自身の親や配偶者の親、自身のきょうだいに預ける場合には、実家が比較的近くにあり、預けやすいという状況があった。

「頼める相手が居ない」1名は、夫妻ともに「転入型」であり、Y市で子どもの世話を頼める人がいない状況であった。例えば、以下のような内容があった。

「元夫があいていれば、元夫に預けて、どうしてもと言う時は連れて行くしかない。私の親は上の子は手がかからないから、預かってくれるけど、下の子は嫌がられる。面倒くさいとか、扱いづらいとか」(No.3)

「私の親が見てくれる。私の親がダメな時は私のきょうだいが見てくれる。（Y市から実家まで）移動に3時間かかる。Y市に頼れる人がいないから、厳しい。頼む必要があるとわかった時に、急だと困るし、大変だから、事前にわかれば、両親に連絡して、預けに実家に行く。急な時は一緒に連れて行く。D市に送っていくよりも早いため。」

「誰もいない。実家がB市だから、誰にも頼める人がいない。」（No.5）

「たぶん私の両親に頼る。（中略）もしくは、現実的には一緒に連れていくか、片方が欠席することになると思う。今のところ、両方がいないことがないという状況はない。まだ片方が欠席するケースしか遭遇していない。葬式に参列したことがあるが、その時は上の子を連れて参列した。上の子はADHDで、（中略）葬式に参列した時も、我慢できずに泣くし、動くし、急に線香のところに行って触って泣くし、大変だった。上の子のほうが本当に大変。下の子は、まだ大人しいから連れていっても大丈夫だと思うけど」（No.9）

「夫が絡む時はなるべく夫の方に頼む。私個人のときは、私の実家に頼むようにしている。私が〜行きたいという理由で夫の方に頼むと姑にどう思われるのかなと思うと、自分の家に預けた方が良いかなと思って。「あの人、子どもを預けて自分のことを優先した」と思われたくないし…私が病院に通った時、病気のこととか根掘り葉掘り聞かれて…聞かれると自分で調べてと思ってしまう。」（No.13）

「私の母が見てくれる。子どもが入院したり、急な発熱の時でも、何かあった時に見てもらえるから安心して任せられる。自分の実家が近くにないと働けないぐらい助けてもらっている。」（No.16）

「夫の実家に預ける。（中略）夫が子どもを預かってと実家に言ってくれるから、預けやすいし、夫の親とも今では関係が良好。最初はやっぱり、預けることを躊躇ったり、気を使うこともあったけど、今となれば気を使わなくても…」（No.17）

「二人同時に居ないことがないようにしている。基本的には、私が諦める。どっちの親も子どものことをビビっているから…ただ泣くだけなら良いけど、ボイコットをするんだよね。何も食べない、何も飲まないみたいな状態を何日も続けるから、脱水症状を起こしたことがあって（中略）その印象が強いみたいで、怖がって預かってくれない」（No.19）

以上のように、「頼む相手」（複数回答）に着目すると、自身や配偶者が子どもの世話をできない場合には、自身や配偶者の親・きょうだいなどの親族に預ける傾向が強い。特に、「妻の両親」や「夫の両親」に預けるケースでは実家が近くにあり、使い分けている場合もあった。妻の実家が移動可能な距離にある場合には「事前に両親に連絡をしてから預けに行く」という事例があった。実家に預けることができない場合には、「一緒に連れて行く」「保育所の一時保育」を利用していた。一方で、子どもの特性や実家が離れているために親に子どもを預けることができない場合には、「2人同時にいないことがないようにしている」や「一緒に連れて行く」傾向がみられた。

（3）不安や悩み・困りごと

ここでは、普段、子育てをしている中で、不安や悩み・困りごととして話された内容を整理する（表6）。

1）人間関係に関わる不安や悩み（困りごと）

19名のうち、不安や悩み・困りごととして話された内容の中で、「人間関係に関わる不安や悩み（困りごと）」が10名で最も多い。10名のうち、「友人ができるのか、他の人とコミュニケーションがとれるのかが心配」が7名、「子どものトラブルで

表6　現在の子育てで感じている不安や困難

人間関係に関わる不安や悩み（困りごと）	10
発達の遅れ・発達に関する不安	7
子どもの行動・子どもへの対応や関わり方に伴う困難	6
就学後のフォロー・職業の選択・自立できるのか等の将来への不安	6
健康面・病院の少なさに伴う不安	5
医療費や保育料・子育て費用などの金銭面での困難	5
家族内で生じた困難（夫にかかわる悩み・困難）	5
特別支援学級・普通学級の選択に関わる不安	5
言葉の遅れ・発音などの言語障害に伴う不安や困難	5
集団になじめるのか	4
落ち着いて取り組むことができるか・授業を聞くことができるのか	3
勉強についていけるのか	3
いじめられないか	3
障害認定の曖昧さに伴う不安や悩み	3
学校から家まで帰ってこられるのか	1
健診に伴う悩み	1

他の人に謝罪・子どもの人間関係のトラブルで困っている」が2名、「障害があることを知って友人が離れていかないか、だまされないかが心配」が1名である。その中には、子どもに障害があることを知って、自身の友人が疎遠になった事例や友人だと思っていた相手に子どもの障がいのことで不安を煽られ、保険の加入を勧められた事例があった。

そのうちの「友人ができるのか、コミュニケーションが取れるのかが心配」の7名をみると、「発音が不鮮明・何を話しているのかわからないなどの言語に関わるもの」が4名、「発達に不安がある・自閉的傾向で友人との関わりが苦手・コミュニケーションが苦手」が2名、「先天性疾患」が1名だった。

「他の機関の利用の有無」については、10名のうち、8名が「療育センター」「聾学校」「リハビリ」「放課後デイサービス」「神経発達外来・病院」など他の機関を利用していた。他の機関を利用していない2名のうち、1名から「療育センターの言語聴覚士に相談をしたい」という意見があった。すなわち、「人間関係に関わる不安や悩み（困りごと）」をもつ10名は比較的、子どものニーズ・疾患・言葉の遅れなどの子どもの特徴を理解した上で心配している傾向があった。

2）発達の遅れ・発達に関する不安

「発達の遅れ・発達に関する不安」が7名である。障害なのか否かがはっきりとしないことでの不安やはっきりと言ってもらえたほうが次にどうしたらいいのかに結びつくが、グレーだとどうしたら良いのかがわからないなどの意見が6名、他の子と比べて発達の遅れを感じたり、療育手帳が交付された後の不安などについて、1名から課された。

「知能的には、特に問題はないけど、手先が不器用で、大学の先生に検査したら、もしかしたら何か出るかもしれないねと言われるぐらいで…ぼーっとしてたり、理解力がまだ足りないと言われる。不安になったりすると、少しぐるぐるまわったりして、少し変な子だなと思われているかなと思う。グレーだと、この後どうなるのかなとか、障害なら障害、大丈夫なら大丈夫とハッキリ言ってもらえるといちいち悩まないで良いのに。」（No.14）

「子どもの発達が年々、目に見えて遅れている

とかわかるから、今は年中で小学校まで１－２年しかないし、将来的に学校のこととか、どんな風になるのか心配。自分としては、子どもは一般的に、幼稚園にいって、学校に行って、いつか結婚してという未来を描いていたけど、目先のことをしていくのが精一杯。１つ１つできることが増えているけど、言葉も増えているし…でも、１人で自分のことができなくて介助が必要だし、誰の手も借りずに自立できるようになるのか常に不安。(中略)身近に昔からの付き合いの人の子どもが娘の１コ下でいるけど、その子と比べても遅れていて、まわりの子がどんどんできているのに…という焦りやもどかしさがあって、モヤモヤみたいなのがあって、市のほうで支援センターでひろばを開放しているけど、行く都度、自分の子どもができないのを目に見てわかって、辛くなって…行くのが辛くなった。(中略)療育手帳、特別児童扶養手当という話をされた時に、やっぱりそうだったんだとショックを受けた反面、やっぱりそうだという結果が出たことで諦めというか、確信に変わった。実際、療育手帳を交付されて、４歳になったけど、彼女のペースで言葉を話す。なんご、何を言ってるかはわからないけど、何か話しているとか、こっちが話すことが伝わるようになったり、成長している。レベル的には少しでも他の子に近づけて、普通のクラスに入れようと思ったけど、無理そうだなと思った。小学校、幼稚園から小学校って、どうなるんだろうと考えれば、キリがない。」(No.11)

３）子どもの行動・子どもに対する対応や関わり方に関する悩みや困りごと

「子どもの行動･子どもに対する対応や関わり方に関する悩みや困りごと」が６名である。複数回答をみると、「子どもに対する対応で悩んでいる」が３名、「子どもの行動」に不安や困っているのが５名である。その５名のうち、「子どものトラブルに困っている・トラブルがあっても言えないことへの不安」が２名、「言うことを聞かない」が２名である。また、「子どもの行動･子どもに対する対応や関わり方に関する悩みや困りごと」６名のうち、５名が夫との関係で困りごとや悩みを抱えていた。

「わがままを聞かずに、甘やかす」、わがままを言わせないけど、甘やかしたほうが言いといわれて、こういうことかなと思うけど、甘やかすとわがままを聞いてしまうから、その切り替えが難しい。周囲に、わがままを聞かない、～買ってというのを拒否するのもあると言われたけど、出先で大騒ぎされると、周りに子どもが好きではない人とか、他の人の目もあって、わがままをきかないというのが一番難しい。きつく言ってもきかない、わからない、伝わらない。子ども達は人の気持ちを察するのが苦手で…大変。泣かせないで、騒がせないでその場を撤収するお母さんを見ると、すごいなと思う」(No.13)

「知的に遅れはないけど、多動で、デパートとかで急にいなくなったり、それでも泣かないから、迷子扱いにならず、自分で探すしかない」(No.14)

「子どものチックとか言葉遣いとか…上はくってかかってこないけど、下の子は「ふん」って感じで、扱い・かかわりが難しい。どういう風にかかわったらいいのか難しい。悩みは子どもが暴れている時に、どうしたら良いのかわからない。怒っても言うことを聞かないし、悪いことを直していきたい。そういう時、夫に助けてほしいのに逆効果。イライラして子どもにあたるのは可哀相だから、しないようにしているけど、自分のイライラ、夫へのイライラ、体のこととか、何でしてくれないの？という子どもに対する不満がぶつかっていると思う。もっと自分のこと、体の不調とか考えたいのに、考えられないイライラ。働くと、１人でいる時間に考えることができるけど、今１人でいるには寝

る時間をカットしなければいけない。夫が仕事をしていれば、まだ仕方ないと思って、許せるけど、私が悩んでイライラしている時に、ソファで寝ていたり、何もしてくれないと余計イライラする。そうなると、睡眠時間を削って1人でいる時間を作ると、自分をどんどん苦しめて悪循環になっていく。具合も悪くなるし、そのイライラとどう向き合っていくのか、子どもとどのように関わっていったら良いのかも難しいし、これが悩んでいること（中略）怒っても言うことを聞かない。そういう時はどうしたら言うことを聞いてくれるのか、悩んでいる」（No. 1）

4）将来への不安

「将来への不安」は6名である。次のような複数回答があった。6名のうち、「子どもが将来自立できるのか」が3名、「今は子ども発達支援センターなどフォローされているが、就学後の子どものフォローはどうなるのか」が3名、「言葉の遅れ・子どもの発達がどうなるのか」が1名、「職業の選択肢に何があるのか」が1名である。

「将来、職業の選択肢、何があるのかという不安がある。この職業はなれないなら、なれないと知っておきたい。なりたいものがあっても、それにはなれないとあとでわかったら、ショックを受けるから（中略）弱視はなれないとか、難聴の人はなれないとか、こういう障がいがあったら、この仕事に就けないとか、逆に障がいがあってもこの仕事についたとか、障がいがあっても、働ける職場の選択肢を知りたい。障がい者でも、パンを作ったり、お菓子を作って売っている人がいるのは知っているけど、そういうのではなくて、障がいがあっても、普通に働けるというところがあるのかなという心配がある」（No.19）

「特別支援学級に入れることになるけど、どういうふうにやってくれるのかがまだわからないから心配。幼稚園では、先生がつきっきりだけど、小学校でもついてくれるのかとか。次男は知的障害と多動で…療育手帳とかはもらっていないんですけど、まだ話せないから、先生とコミュニケーションをどうやっていくのか、今は子ども発達支援センターに2年通っているから、単語だけでも通じるけど、そこが心配（中略）ここは就学前までだから、小学校に入ったら療育は3か月に1回の病院のみになってしまうから、それも不安。小学校に入ったらどうするのか。言葉の教室は小学校に入ってもあるみたいだけど…でも、言葉の教室はあるけど、無くなるみたいだから、なくなったらどうするのか。」（No.17）

5）「言葉の遅れ・発音など言語に関わるもの

「言葉の遅れ・発音など言語に関わるもの」が5名である。例えば、滑舌が悪く、発音が不鮮明、言葉が出ない・話せないなどである。それらによって、周りの人とのコミュニケーションがとれるのかという不安を抱いていた。「他の機関の利用の有無」については、5名のうち1名のみY市以外の療育センターに通っていたが、残りの4名については、子ども発達支援センターのみを利用していた。また、5名のうち、3名は「発達の遅れに対する不安」（2例）、「普通学級か特別支援学級か」（1例）という不安を言語に関わる不安と同時に抱いていた。

「小学校入学で不安なことは、長男が普通のところに入れるかなーと…言葉が遅れていたり、ものの名前を言えなかったり、自分のことを伝えられなかったり、そうそう、手袋事件とか。こないだ長男が手袋をなくした時に、手袋がなくなっていたから、どうしたの？って聞いたら、「○○ちゃん」しか言葉を発することができなくて…結局、○○ちゃんが持っていったということも言えなくて。こんな感じで自分のことも伝えられないし、単語がぽんぽんで伝わりにくい。たとえば、幼稚園で豆まきをしたときも、「オニ、

まめ」だとか、片言しか言わなくて、こんな状態で小学校に入ると思ったら不安」（No.12）

6）医療費や保育料・子育て費用などの金銭面

「医療費や保育料･子育て費用などの金銭面」も5名である。金銭面の不安としては、医療費や保育料・子育てにかかる費用、障害認定されないことによる自費負担の辛さなどである。現在子ども発達支援センターに通っている子どもが他の機関を利用しているかについては、5名のうち2名は、他の機関（神経発達外、療育センター、）を利用していた。残りの3名については、他の子どもが通院・投薬治療中である場合や「保育料の値上がりに伴う負担」、「子どもの教育費などを含めた日々の子育てにかかる費用」の負担があった。

「金銭面は靴の話。弱視だから、メガネとかも必要だけど、自費だと覚悟している。定期通院だけ無料…（中略）将来、医療費とかも結構かかるんだろうなと思う。靴も一時期こだわりが強くて同じものをずっと履いてくれたから良かったけど、そんな何足もいろんな種類が欲しいとなっても、買えない。（中略）障害と認定されないけど、障害があるなら、障害とはっきり言ってくれれば、次どうするかも考えられるから、はっきり言ってほしいと思う時がある。自閉症とかも…片耳が難聴で聴こえないし、目も少し遠視、低筋長で運動遅延、ジャンプもできない。おぼれている人みたいにもがいているだけ。（中略）全部障害には認定されない。ひっかからないけど、少し他の人よりもできないことがある感じ。最初は走ったり、動くこともできなかった。どれも生活に困らない程度。例えば、靴を用意してくださいと言われても、うちの場合は補助もなくて、実費負担。補助を受けられるみたいで、うちもとれると言われたけど、申請しても却下になって、自費負担はきつい。難聴とか、低筋長で、必要なことは変わらないのに、補助にならないし、靴でも、すぐに1万を超える。区分で、補助の該当にならないことで、大変なことがある。同じように症状があって大変なのは変わらないのに、自費負担か、補助がおりるかどうか、区分されるのは辛い」（No.19）

7）夫にかかわる悩みや困りごと

同じく、「夫にかかわる悩みや困りごと」が5例あった。5名のうち、3名が「夫が子どもの障がいに対する理解がないこと・夫の行動」に悩んでいた。また、5名のうち、2名は「夫との意見の食い違い」に悩んでいた。「移動タイプ」を見ると、女性は「転入型」が3名、「Uターン型」が1名、「定住型」が1名であり、男性は「転入型」が4名、「定住型」が1名である。「仕事」については、5名のうち、女性は全員「専業主婦･無職」だった。夫の仕事については、5名のうち3名が「会社員」、「公務員」1名、「教員」1名だった。「家事･育児の分担」については、5名のうち3名が「すべて妻」が行っており、「家事全般は妻･夫は育児には協力的」が1名、「家のことは主に妻がしているが、夫も協力的（妻が具合悪い時に協力）」が1名だった。夫が協力している2名においても、夫に「家事は女の仕事といわれ、家事がおろそかになると威嚇された・怒られた」事例や、普段夫は仕事が忙しくほとんど家におらず、妻に任せていた事例である。また、「すべて妻」が行っている場合には、結婚する時に夫に「家のことはしない、俺に負担をかけるな」と言われている場合や夫に頼んでけんかになるのが嫌で、仕事をやめて専業主婦になった場合などである。5名すべてにおいて、家のことは女性の役割だという性役割意識・規範意識が高い傾向があった。また、「相談相手」については、5名すべてが「夫」を相談相手として挙げていなかった。夫と話す時間の有無については、「少しもてている」という回答があったが、「夫が話を聞いてくれないから、自分1人で決めて事後報告をしている」、「夫と話してもけんかになるから、話さないようにしている」「何の解決にもならないから夫に話さないようにしている」「夫に話すよりも夫の母に話すほうがいい、夫の両親がいるからまだ持っている」などの意見があった。

「子どもの障害に対する理解が全くない。上の子の障がいのこと、こうやったらダメになるということをするし、上の子の関わりが全く分かっていない。だから、父と上の子の関係が良くない。夫婦間で話す時間は持てているのか、持てていないのか…話をしても、あまり聞いてくれない。発達検査やこども発達支援センターのことも私1人で決めて、手続きも済ませた後に夫に事後報告をした」(No.9)

「夫婦間で話す時間は少しもてている。お互いの子育て観はあるけど、夫に言っても適切な答えが出ないため、言わない。文句を言われたくないから。行き詰っている時、子どもが暴れて上手くいかない時、暴れて大変な時は夫に助けてほしいのに、夫は普段子どもと関わっていないから文句しか言わない。子どもが暴れて大変な時は夫が助けてくれたらいいのに…夫は子どもの言葉遣いや態度にイライラしたり、「なんでこうなの？」と言うだけで、何の解決にもならない。夫と話しても何の解決にもならないから、言わない。(中略)どうしてもという時は子どもが寝た後に話すようにしている。あーしてもダメと言う時は夫に話すけど、反応が薄くて話しても意味がないし、答えがない」(No.1)

「夫は発達障害だと他の子のように言っても、言うことを聞かないというのがわからない。夫にしたら、子どもはダメな子で、子どもと夫を2人にすると、夫が子どもをぶつから、2人にしないようにして（中略）夫は「発達障害の子どもにも普通の子どもと同じように頑張るべきだ」と言うから…さすがに私が夫に言い返そうと思ったけど、子どもが言わないでと…(中略)医者からも言っても変わらないから言わないでいなさい、1コから5コにしなさいと言われた。子どもに危害を加えているから、夫ができることを5コにするとか、3コにするということではないと思う」(No.13)

8）特別支援学級か普通学級かに関する不安や悩み（困りごと）

「特別支援学級か普通学級か」に関する不安や悩み（困りごと）は5名である。「特別支援学級・普通学級の選択」が3名、「特別支援学級・普通学級それぞれの子どもへの対応に対する不安」が1名、「養護学校選びに伴う悩み」が1名である。5名のうち、他の機関を利用していない1例を除いた4名が「療育センター」を利用し、「児童発達支援・放課後デイサービス」などを同時に利用している事例もあった。また、5名のうち、3名が夫に相談していた。

「小学校入学で不安なことは、子どもが普通のところに入れるかなと」(No.12)

「去年とかは、今は遅くても、少しでも他の子に近づけて、普通のクラスに入れようと思ったけど、無理だと思った。幼稚園から小学校って、どうなるのだろうと考えればキリがない(中略)障がいに対する偏見はないけど、できれば普通の学級に入れてあげたいと思うところもあるけど、無理して普通学級に入れて子どもに苦労をさせるよりも、特別支援学級に入れても仕方ないと言うか…夫とその部分は話している。日頃から、障がいのことを話すと辛くなるから、何か決断をしなきゃいけない時に話す（中略）障がいがあるということを考えるのはきつい」(No.11)

「うちの子はたぶん特別支援学級に入ることになるけど、昔のように、特別学級と普通学級みたいに分離されているのではなくて、できることは普通学級で一緒にやって、できないところは特別学級でやろうという形で、そこも心配。普段は1人の先生がつきっきりなのに、小学校に入ったら、特別支援学級でも、普通学級で学ぶ時もあるなら、普通学級で学ぶ時もついてくれるのかとか、どういうふうになるのかとか。(中略)親が普通学級に入れるか、特別支援学級

に入れるかを決めて良いみたいで…グレーゾーンだと、親が普通学級にいれるというのを聞いて、親のエゴで普通学級に行かせるのもどうかな…と思うし、子どもに無理をさせて普通学級に入れるくらいなら、無理して普通学級に入れるよりも、特別支援学級に入れて伸ばせることろは伸ばして行こうと思う。特別支援学級でも、できるところは普通学級でやるみたいだけど、普通学級に入れてしまったら、特別支援教育を受けられないし、個別のケアも受けられない。私のところは、療育センターで知的障害と多動と診断されて（中略）まさか自分の子どもが障がい…とか思ったけど、そこまで悩まなかった。むしろ、特別支援学級に入って、できることは普通学級で一緒にやるとか、どういうケアを受けられるのかが気になる」（No.17）

「上の子はずっと特別支援学級で特別支援を受けていて、そういうのがあるのをわかっているから、下の子の小学校入学にはそれほど心配はない。（中略）下の子は自閉症と診断されている（中略）もう少し障がいを持っている人が幅広く、通える高校があると良い。上の子は発達に問題はないけど、病気持ちということで、断られる学校もあるし、通えないと言われるところもある。いろんな養護学校を探しているけど、（中略）一番近くて、K（政令指令市）で、それが悩んでいる。もっと近くにもあればいいのに（中略）（Q：近くの養護学校、Lは？）断られた」（No.3）

9）障害認定の曖昧さに関わるもの

「障害認定の曖昧さに関わるもの」が3名である。3名すべてが「知的に遅れ・障害があるか否かに関するもの」である。そのうち1名は、子どもがニーズを抱えていても、障害認定を受けている場合に受けられる補助が受けられないことでの負担を述べていた。「子どもの年齢」をみると、「3歳」が2名、「4歳」が1名であり、3名すべてが幼児期である。また、「他の機関の利用の有無」については、3名すべてが「療育センター」を利用している。その他に、「病院」が1名「放課後デイサービス」が1名、「聾学校」が1名である。

「今は足の問題だけだけど、知能も遅れているかもしれない。これぐらいの年の時は、知能が遅れているかどうかも、年が若いからわからなくて」（No.1）

「知的に遅れはないけど、多動で（中略）大学の先生に「検査したら、もしかしたら何か出るかもしれないね」と言われるぐらいで…ぼーっとしていたり、理解力がまだ足りないと言われる。不安になったりすると、ぐるぐるまわったりして、少し変な子だなと思われていると思う。グレーだと、この後どうなるのかなとか、障がいなら障害、大丈夫なら大丈夫とハッキリ言ってもらえるといちいち悩まないで良いのに」（No.14）

10）健診に関するもの

「健診に関するもの」1例は、健診で発達に遅れ気味の子を持つ母親が悩むこと、発達が遅れ気味の子ども・子どもをもつ家族への配慮について述べられた。

「健診も1歳半、3歳児検診、そのあと就学前健診で、2歳、4・5歳がないから、そこに健診があるといいと思うけど、同じ年代の子しかいないから、早い・遅いを目の当たりにするからへこむ。同じ年齢で発達の遅れや早さがわかる。一度、下の子の健診を夫に任せたら大変だった。すごくへこんだし、衝撃を受けたみたいですよ。（中略）遅れ気味の子どもに対する配慮をもっと上手くやってくれると良いな。発達が遅れ気味の子をもつ母は悩んでいるけど、そこ（健診）で目の当たりにして余計悩むし、へこむ」（No.9）

以上のように、現在の子育てをする中で感じて

いる「不安や悩み（困りごと）」と子ども発達支援センターに通うことで生じている大変さ（後述4（4））を含めると大きく4つに分かれる。

第1に、ケア（子育て）そのものから生じている困難である。例えば、子どもとどのように関わったら良いのかがわからない、外出先での対応や子どもの特性に合わせたかかわり方が難しいなどである。第2に、子どもの言葉の遅れや発達の遅れ・障害に対する不安や困りごとである。例えば、子どもの苦手なこと・人間関係に関する不安、小学校入学に関する不安、特別支援学級か普通学級かを選択することの葛藤、将来の職業選択、自立できるのかという不安などである。第3に、4（4）で示す通り地域の条件やサービス面で感じている不安や大変さ、特に子ども発達支援センターに一緒に通うことで生じていた。例えば、子ども発達支援センターが近くにないことで通うことの大変さ、家事や仕事などの時間の調整の大変さ、子ども発達支援センターが就学前を対象とする子どもへのフォローであるため、就学後のフォローに対する不安などである。療育センターはY市外にあるため、通う頻度の少なさから生じていた。

第4に、家族内の役割の分担・固定化から生じている悩み（困りごと）や大変さである。特に、役割が固定化され、ケアの負担が女性に集中することで困難が生じていた。例えば、性役割意識・規範意識の高さ、夫が子どもの障害に対する理解が低いこと、普段子どもと関わる時間が少ない夫の行動の悪循環・夫と子どもとの関係の悪さ、夫のサポートの少なさ等である。

（4）相談相手

前節で整理したように「不安や悩み、困りごとなどを普段どなたに話しますか、相談しますか？」という質問に対して得られた内容を整理する（表7）

悩みや不安を話す相談相手（複数回答）については、「自身や配偶者の家族」「夫」などの親族や「ママ友・友人」などの身近な人に相談する傾向が高かった（表7）。特に、全ての事例に共通して、子どものことを理解している人に相談していた。

表7　相談相手（複数回答）

ご自身や配偶者の親やきょうだい	11
夫	9
ママ友・友人	8
子ども発達支援センターの職員	5
保育所・幼稚園の先生	4
会社の人・職場関係者	2
医師	2
療育センターの職員	2
学校の教員	1
児童相談所	1
他の児童発達支援事業所	1

例えば、家族や現在通っている機関の職員・先生、同じ年齢の子どもや発達に不安を抱える子を持つ友人に話したほうが悩みが解消されるという意見があった。例えば、以下のような内容である。

「友達のお母さんと話して、ママ友同士の会話で。親に聞いても、昔のことだから忘れたと言われるから、幼稚園の先生にも話す。上の子は幼稚園では良い子で暴れたりするのがわからない、イメージがつかないみたいだけど、下の子は幼稚園でも家と同じ感じだから理解される。子どものことを知っている人と話すことで苦しさや悩みを解消している」（No.1）

「友人、親、夫など身近な人に相談する。（Q：友人はY市の？）知っている人も少ないし、近くで話せる人がいない。Y市にあまり知り合いがいないから、実家に帰った時に、友人の子どもが同い年だから話もできる。私の同級生でかつ、子どもの年も性別も同じだから、気軽に話しやすい」（No.4）

4．子ども発達支援センターの利用

（1）通うきっかけ

子ども発達支援センターに通うきっかけは、「幼稚園や保育所の先生に勧められた」が8名で最も多い。次いで、「B市の療育センター」が4名、「病

院の医師」が2名、「健診・保健師さんに相談」が4名である。健診では、子ども発達支援センターの職員に直接相談している場合があった。次いで、「子ども発達支援センターに通っている友人に聞いて」が1名だった。19名の特徴として、子どもの発達の遅れが気になっている場合には、自発的に相談している傾向があった。なかには、B市の療育センターでY市の子ども発達支援センターの存在を知ったが、健診の際に保健師に相談したけど何も言われず、勧められることが無かったため、自分から切り出した事例や、健診の時に保健師に相談しても、「大丈夫」としか言われず、自分で病院などに相談している事例が4例あった。それらは主として、発達の遅れが気になる、言葉の遅れや発音が不鮮明・話すことができないなどの特徴があった。

（2）通う頻度

子ども発達支援センターに通う頻度については、「週1回」が17名で最も多い。そのなかには、「仕事が休みのときは月5回に増える時もある」が1名、「調子が良い時には週2回通っている月もある」が1名である。次いで、「月に2－3回」が2名である。

（3）主に一緒に通っている人がいけない場合

子ども発達支援センターに主に一緒に通っている人は誰かについては、19名すべてが母親（女性）である。そのうち、「夫の仕事が休みのときは夫も一緒に行く」が4名である。主に一緒に通っている人が行けない場合は、誰に頼むのか・どのようにしているのかについては、19名のうち「休む」が9名で最も多い。次いで、「日程を調整する」が6名、「夫が休みなら夫か、日にちを変える」が2名、「日にちを変えるか、休む」が1名、「日にちの調整は融通をきかせてくれるが、私か夫が行けないときは休む」が1名である。

「私が来られない日は、夫も仕事が忙しくて休むことができないから、子どもが熱でたら休みにしている。夫に代わりに来てもらうことはない。通うための工夫は、先に子ども発達支援センターの日程を決めて、それに合わせて生活を組み立てている」（No.15）

（4）子ども発達支援センターに通ってよかったところ

1）子どもにとって良かったところ

「子ども発達支援センターに通うことで、お子さんにとって良かったと思うことはどのようなことですか」という質問に対して得られた回答は、大きくわけて11種類ある。

第1に、継続して療育を受けることが出来ること。第2に、子どもが楽しんでいることである。第3に、家ではできない遊びが出来ること、第4に、「子どもの発音や言葉の数が増えた、向かい合って会話を出来るようになった」ことである。第5に、「子ども発達支援センターで顔見知りが増えて、他の子と関わることができるようになってきた」。第6に「集中して物事に取り組むことが出来るようになった」。第7に、「前よりも自信をもつようになった」、第8に「先生に教わったことを生活の中で活かせるようになってきた」、第9に「自転車や運動を嫌がらなくなった・運動への苦手意識が薄れて楽しむようになった」、第10に、「子どもを1対1で見てくれる・子どもが我慢しなくて良い（集団生活やきょうだいがいると1人を見てもらえる機会が少なく、遊びなどで我慢することもある）」。第11に、遊んだ後の片付けや順番を守るなど社会性が身についたことである。例えば、以下のような内容である。

「言葉の問題、言語障害があって…発達障害でも親が教えられるのは生活の範囲、見ている部分だけ。子どもの引き出しを増やしたかったから、ここに来たんだけど、言葉の幅が広がった。人の話を聞けるようになった。向かい合って人に聞かれたことに答える、受け答えができるようになった。集中力が増したというのが通わせてよかったところ」（No.2）

「言葉も増えたし、ちょっとだけ座って作業を

したり、パズルもできるようになった。集中して取り組むことができるようになった。何より楽しみにしている。毎日のように子ども発達支援センターに行くのを楽しみにしているし、体を動かして遊ぶのも楽しいし、絵本も好きになったし、読み聞かせが嫌いで自由に自分で読むのが好きみたいで…でも今は「読んで」と言うようになった。１人でも本を読んだりしている。字も読めるようになった」（No.4）

「先生から教えてもらったことを生活に生かせて来ている。具体的に手伝って欲しいこととか、言葉で表現できなかったことが表現できるようになってきたし、このまま言葉が増えたり、伸びるのかなと思う。やりたいことができなかった時に、自分の中で消化、切り替えができる場面が増えたり、できることが増えている」（No.7）

「子どもが変わったところ。（Q：どういうところが変わりましたか？）他の人とできるようになった…前は私としかできなかったことが他の人でも大丈夫になった。例えば抱っことか…通う前は自閉症なのかなと疑っていたけど、医者は自閉症ではないとは言っているけど…なんか病気があるのかなと思うから、手をつながないとか、触れない、一人の世界に入っている、何言っているのかわからないとか…前は他のお母さんと遊ばせるのは申し訳ないと思うこともあったけど、今は遊べるようになったし、通わせてよかったと思う」（No.19）

２）母親自身にとって良かったところ

「ご自身にとって、子ども発達支援センターに通ってよかったと思うことはどのようなことですか」という質問に対して得られた回答は、以下の11種類ある。

第１に、「子どもが楽しんでいること」である。第２に、「相談に乗ってくれる、不安や抱えている問題の話・愚痴を聞いて専門的な助言をくれる」である。第３に、「家では出来ないいろんな遊びができるところ」である。第４に、「他の支援やサービスのことを教えてくれる、保健師や幼稚園等の他機関との連携が良い、他機関と連携して子どもをサポートしてくれるところ」。第５に、「子どものことを１対１で見てくれるところ（家や幼稚園・保育所では子ども１人だけと関わることはできない）」。第６に、「専業主婦だと夫が話を聞かない・理解してくれないと話し相手がいないから、母親にとっても息抜きになっている•楽しい」。第７に、「子どもの出来ることが増えたこと（運動面、言葉の数が増加、発音、順番を待てる、トイレ、着替え、手先が器用になった、落ち着いて取り組むことができるようになった、人と関わることができるようになってきた等）」。第８に、「子どものできることや出来ないことが何かがわかってきた、できないことでもやり方や言い方を変えればできることがわかった、子どもの変化や違う側面を見ることができる」。第９に、「子ども発達支援センターでやったことを家に戻った後も取り入れて勉強になる・子どもとの関わり方を教わっている、子どもとの関わりに幅ができた」。第10に、「先生方が頼りになる」である。第11に、悩みや不安を持っているのが自分だけではないこと、共有•共感できる人に出会えた（ママ友、職員など）。例えば、以下のような内容である。

「話を聞いてもらえるし、ちょっと問題を抱えたこととかも、普通ならわかってもらえないけど、専門的なことを知っているから、助言もしてもらえるし、発達障害のこと、運動面や体のこととか教えてもらえるから良かった。（中略）訓練を受けているメインが運動面だけど、幼稚園でここに通っていない子のほうが落ち着いていない子もいて、ここに来ている子のほうが訓練をされて、言われている分、言われたら頑張ってくれる。落ち着いていられる。（中略）あと、グレーって判断が難しいんだなって思う。医者が自分もこだわりが強くて、アスペルガーとか発達障害とかそういう傾向があるけど、そうい

う傾向があるということと疾患は別だって話していたし、診断受けずに普通にしている親のほうが子どものことを気にしていない。「子どもには何の問題もない」みたいな感じだけど、実際見ていたら、あの子のほうが発達障害じゃないの？と周りが思うほど、行動に出ている人もいる。こういうところに通っている子どものほうが普通に訓練をされているから、言うことも聞くし、落ち着いている。グレーって、こういうところに来る・来ないも親次第だし、すべてが曖昧で難しいなって思う。」（No.1）

「幼稚園や保育所だと、自分の子が一番できない子、他にはこんなにできない子はいないだろうなとか、うちの子はダメだと思うけど、ここに来て、いろんな障がいがある子もいて、みんな大変だったなと思った。今までは自分の子が発達、成長が遅いと思っていたけど、障害のことや体のつくりのことがわかって、他の子もなっているんだとわかったことが良かった」（No.13）

「自身にとって良かったことは、先生と話すことで息抜きになる。子どもが楽しそうにしているのを見ていると嬉しいし、専業主婦だと夫が話をきかない、理解してくれないと、話す相手も限られてくるから、先生と話すことが親にとっても、息抜きになっている」（No.9）

「子どもの変化を見られたこと。家から出られないけど、子ども発達支援センターとか用事があると車を夫から借りて、外に出ることができるから幸せ。家を出られることが本当に幸せ。普段が閉じ込められている。近くにお店もないし、公園もないし、気軽に出かけることもできないから、子ども発達支援センターに行く日は車を借りて外に出られる日になっている。普段は家の周りを散歩するだけ。この子を連れてそんなに遠くまでいけないから、行くところも限られている」（No.19）

（5）子ども発達支援センターに一緒に通う大変さ

ここでは、「子ども発達支援センターに一緒に通うことで大変さを感じることがありますか？」という質問に対して得られた内容を記す。子ども発達支援センターに一緒に通う大変さについては、19名のうち13名が大変さを感じることがあるという回答だった。その内容は大きくわけて5つある（表8）

例えば、以下のような内容があった。

「たまに…疲れている時は大変さを感じることもある。辛くはないけど、仕事が空いている時間は、前なら家のことをしていたけど、それができなくなる。時間をみつけて違う時にやっている。」（No.16）

「時間の都合のつけ方は、この週は子ども発達支援センターに行くから予定を入れないようにしようとすると、他の予定を違う週に入れることになるから、ほとんど家にいられない。家にいない時間が多いと、家のことが終わらないと思って…歯医者も我慢したり、今は病院に通っているけど、それぞれ日程を調整していたけど…ここに通うのを週1に変えたから、これからは病院とかにも通えるようになる。」（No.12）

表8　子ども発達支援センターに一緒に通う大変さ（複数回答）

子どもがぐずる時・子どもが間に合うように準備をしない	5
移動手段、移動にかかわる費用や時間（長時間の運転疲れ）	5
仕事や家事などの時間を調整・都合をつけること	5
他の子どもの体調が悪い時	1
母親自身の体調・だるい時、通うのが面倒くさいと感じる時	1

「子どもは最近寝るのも起きるのも遅いから、ギリギリ支度して、ここに来た感じ。子どもが時間に間に合うように移動しない時は大変。私の都合をつけるのが大変というより、子どもの行動によって時間の都合をつけるのが大変」（No.3）

「近場ではないから、すぐ来れる感じではないから、週1だけど、時間の都合をつけるのが大変。近場であればいいのにと思う。（中略）近くにこういうのがあれば助かるのに…」（No.6）

一方で、19名のうち、6名が大変さを感じていないと答えた。主に得られた回答は、子どもが喜んで通っていることや親にとっての楽しみになっている場合、職場の融通が利く場合や無理をしてない等があった。

「今のところ、ないかな。私自身の息抜きにもなっているし、私自身も楽しんでいる」（No.9）

「ふぶけば休むし、あまり無理してないし、日程を変えてもらえるから負担はない」（No.7）

「子どもの体調が悪い時、夫は仕事を休めないから…子どもはまだ小さいので、風邪をひいた時とかも私の職場は融通が利くし、休みを取って、子どもを見られるということはできる。（Q：職場の配慮は）子どもを育てる親への配慮はある。子ども発達支援センターに通うこと、予定をいれることにも大して大変さはない」（No.15）

（6）子ども発達支援センターや市に対する意見や要望

ここでは、「普段子育てをする中で、子ども発達支援センターや市に対して、何か意見や要望はありますか？」という質問に対して得られた内容を整理していく。意見や要望があったのは、19名のうち、8名である。残りの11名は意見や要望は無かった。以下に、まとめていく。

意見や要望については、主に以下の11種類である。第1に、「利用回数を増やして欲しい、利用時間を増やして欲しい」である。第2に、子ども発達支援センターの存在をもっと早い段階で知りたかったという意見である。その中には、保健師さんに相談しても大丈夫と言われて何も言われなかったから早く知りたかったという意見や健診時の保健師さんの判断が曖昧だったのではないか、もっと早くから子ども発達支援センターの存在を知っていれば子どものできることが増えたと思うという意見があった。第3に、子ども発達支援センターでの外遊びを増やして欲しいという意見である。第4に、急な場合の子どもの預け先がほしい。第5に、市の取り組みがわかりづらい・グレーゾーンに対する支援の不足や情報不足である。第6に、医療費や保育料、薬代、子ども発達支援センターの利用料、予防接種などの費用の負担を軽減して欲しいという意見や要望である。第7に、障害か否かをはっきりと伝えて欲しいという意見である。第8に、手続きの大変さ、申請書のわかりにくさに関するものである。第9に、言葉の遅れや多動などがあっても普通学級で過ごしている等の普通学級・特別支援学級にどのような子どもが通っているのかを知る機会を作って欲しいという意見である。第10に、子育てサークルに入りにくい、子育て支援センターやひろばを利用しづらいという意見があった。例えば、他の子に比べて発達の遅れを目の当たりにして辛くて行きづらい、集団行動が苦手な子ども・保護者にとっては通いづらい・輪の中に入ることができない、すでに仲良しグループができていて入りにくい、他の子のおもちゃをとるから行きにくい等である。例えば、以下のような内容である。

「前にいたところ（Y市の近隣地域の町）は、全て町が負担をしていた。医療費も全て負担をしてくれた。Y市は小学校以上はかかる。そこの町は中学校まで負担をしてくれていた。予防

接種も医療費も全て負担してくれていた。子育てについて、市が面倒を見てくれるようになれば来やすい。利用しやすくなると思う。子どもの部活の費用に比べれば安いけど、市の負担が無いよりはあったほうが良い。前のところは予防接種を行くように呼びかけていて、健康が一番大事だから…と町で負担をしていた。病院も、予防接種も。」（No.2）

「もう少し、外で遊んで欲しい。家にいることが多いから、自分ができないことをして欲しい。通っている中で、外遊びが１回で…もう少し外で遊ぶ機会を作って欲しい。夏は公園（Y市にある森林・草原・花畑などが広がる自然豊かな公園）に行くこともあるから、満足しているけど…普段は家にいる子で、外に出たがらないから、外に連れ出して欲しい。（子どもは）夏は外に結構いるけど、寒いのが苦手なのか、冬は布団にくるまっている。一緒に外に連れていったら、外に出るんだろうけど、今は赤ちゃんがいて一緒に出られないから、私ができないから、一緒に連れ出してくれたら嬉しい。」（No.12）

「私のほうの問題かもしれないけど、もう少し通えたらいいのにって思う。もう少し長くいられたらいいなと思う。1日1時間30分とか短い時間だから、もっと長く見てもらえたらいいな。（Q：職員さんと話す時間は？）職員と話す時間はあり、十分に相談にも乗ってくれる。困った時や不安な時も相談できる」（No.6）

「診断がついていなくて、グレーゾーンでちょっとわからないんだけど、もう少し、不安を取り除けるように、もっとこれがどうなっているとか言ってほしい。わからずじまいになっているから…はっきりと、障がいとなっている人とは違って、グレーゾーンだから不安がある。大丈夫なら、大丈夫ですよと言ってくれたら楽になるのに…。大丈夫じゃないから、言えないのかもしれないけど、はっきり言ってもらえると…ありがたいかな。このあとどうなるのかなとか、障がいなら障がい、大丈夫なら大丈夫とハッキリ言ってもらえるといちいち悩まないで良いのに」（No.14）

「仕事をしていたり、どうしてもこの日出かけたいという時や、急に熱を出した時とか、幼稚園では預かってくれない時とかに、１時間だけでも、見てくれるところがあるといい。予約しなきゃ使えないとかではなくて、何かあったら、すぐに見てくれるところがあると良いな」（No.19）

「言葉の遅れや多動などがあっても普通学級で過ごしている等の普通学級・特別支援学級にどのような子どもが通っているのかを知る機会を作って欲しい」（No.11、No.17）

「Y市の病院を受診していれば、結果が出るまで待ってくれるけど、B市の病院を受診しても、３割負担。自立支援は年齢が上の人も１割だから、精神障害を患っている人とか、子どもは安くしてほしい。金銭的サポートが必要。本当に手もかかるし、薬代も高すぎ。」（No.9）

「幼稚園に入るまでこういうところがあるのを知らなかったから早い段階で知りたかったなと思う。保健センターでも何も言われなかったから、もっと早く知りたかった。（Q：保健師さんはこういうところがありますとは？）保健センターに通っている時に、何も言ってくれなかったから、もっと早くに言ってくれれば、もっと伸びもあっただろうなと思う。保健師さんに言葉が出ないとか、言葉が増えないと言っても、「幼稚園に行ったら言葉も増えるから大丈夫」と言われたし…多動だけならわからないままで行く人もいると思う。学校でもこの子そうだよねーと思う子もいるけど、普通学級にいるし、もっと、こういうところがあるということをもっと知れるような状態に市が作ってくれたら

良いのにと思う。(中略)不安になって保健師さんに相談に行っても、大丈夫と言われるだけで結局、幼稚園に入らないとつながらなかった。子ども発達支援センターでも、「相談して良いんですよ」って言っていたけど、自分から相談できるってことを通って初めて知ったし、ここの存在も幼稚園で言われるまで知らなかった。それに保健センターで、保健師さんに大丈夫と言われたのに、子ども発達支援センターとか他のところに相談ができるとも思わない。保健師さんの判断に文句をつけているみたいだし…保健センターでも、この子に問題がありますよと言えないのかも知れないね。言われて傷つく人もいるし、私ははっきり言ってもらいたいタイプだけど（笑い)。幼稚園でも遠まわしに言う感じだった。幼稚園でも、春休みに入るので、いつもは1人の先生がついてくれているんだけど、休みに入ると難しいから、春休みに見られない期間にこども発達支援センターで見てもらって、訓練してもらったらどうですか？とすごくオブラートに包んで言うから、最初なにを言っているのかがわからなかった。よくよく話を聞いてみると、子ども発達支援センターに行った方がいいって言っていることがわかったけど。たぶん、なかには「なんで、うちの子が行かなきゃ行けないの？　家では何も問題なく、大丈夫なのに」とか言う人もいるから、オブラートに包むのかもしれないけど。でも、はっきりと言ってくれないと、そのままわからずに過ごして、子どもの伸びる可能性を奪うことにも繋がると思うから…私ははっきりしてほしいと思っちゃうけど、はっきり言われて嫌な人もいるし、オブラートに包み込みすぎてもダメだし、難しいところだよね。私ははっきりして、次どうしたらいいのかを考えていきたいし、子どものののばせるところは伸ばして行きたいし、子どものためになるなら、利用できるものは利用したいと思うけどね。」(No.17)

意見や要望がない場合には、大きくわけて4つある。第1に、「医療費の無料化によって負担が軽減したこと。第2に、子ども発達支援センター以外のB市のリハビリやY市のデイサービスの利用を増やしたことで負担が軽減したこと。第3に、今の状態に満足していたり、今のままでよいという場合である。第4に、他の市を知らない、他の機関を利用していないなどの他に比べるものが無いから不満や意見も無いというものである。例えば、以下のような内容である。

「今でも良くしてもらっているし、1つ聞いて、10答えてくれるし、集団で遊んだり、担当の先生だけではなく、他の先生も子どものことを可愛がって相手にしてくれて…感謝をしているから、不満や要望はない」(No.11)

「特にない。利用料もそんなに高くないし…(Q：利用頻度は？）最初は週2回だったけど、面倒で週1回にした。デイサービスのほうが送迎しなくていいから、楽だから…そっちを増やした。自分で送迎しなくて済むし、1人で行ってもらえるから。」(No.3)

「ない。(Q：利用料とかは？）今のままでいい。お金がかかるのは仕方ない。Y市の医療費は小学生まで無料だから、負担が減るようになった。だから、リハビリに行かせたいのに、本人は行かない、行きたがらない。せっかくお金がかからなくなったのに。今までは幼稚園にお迎えに行って、そのままB市に連れて行ったけど、幼稚園でお菓子を食べてから、行くのが億劫になって行かない。子どもが行きたがらないのに、無理に連れて行くのも嫌だし…(中略)本当にY市のはリハビリで、お年寄りの隣で訓練している感じだけど、B市のリハビリだと遊び感覚で、おもちゃもあって楽しめる。けど、Y市のいかにもリハビリと言う感じでも行ったほうがいいなと思う(中略)子育て支援センターも1ヶ所だから、顔見知りになるし、仲良くなりやすいし、公園に行っても、母親同士知って

いて、子どもを遊ばせられるし、誰かが見てくれているし、ちょうどいい。友人同士で、家汚くて、人を入れられないという時でも、公園に行けば、子どもを遊ばせられるし、親同士で話せるし、ちょうどいい場所。働いている人とかだと、たまに行くだけなら、物足りないかもしれないけど、普段から遊ばせている人にはちょうど良い」（No.1）

5．調査結果のまとめ

本稿は、これまで地方都市で発達に不安を抱える子をもつ家族がどのように家事や育児、介助などを行っているのか、地域の特徴や地域の社会資源とどのように関係しているのかについて調査結果を整理してきた。その際、特に3点に着目してきた。第1に、その地域の社会資源や制度が子育て生活にどのように影響しているのか。第2に、本人が持つ社会関係が子育てを営む時にどのように関わっているのか。第3に、本人の意識である。以下、結果についてまとめていく。

（1）地域資源とのかかわり

ここでは、地域の社会資源や制度が子育て生活にどのように影響しているのかについてまとめる。

第1に、子ども発達支援センターが子どもと親に果たしている役割についてである。子どもにとっては、楽しんでいることやできること（言葉・運動・集団行動・ルールを守ることができるなど）が増えていることや、1対1で見てもらえること、家ではできないことができ、教わったことを生活の中で活かせることができるなどの良さがあった。また、母親にとっては、子どもが楽しんでいることに加え、母親自身にとっても楽しい・息抜きになっており、不安や抱えている問題の話や愚痴を聞いて専門的な助言・相談に乗ってくれるところ、子どものできることやできないことがわかったなどが述べられていた。すなわち、療育の場として子どもの成長を育むだけではなく、子どもも楽しみ、一緒に通う保護者にとっても息抜きや楽しめる場所、相談できる場所になっていた。

第2に、療育を受ける場所が限定的である。Y市には、民間企業が運営している未就学児（0歳～5歳）と就学児（6歳～18歳）を対象とした児童発達支援サービス・放課後等デイサービスが1ヶ所、社会福祉法人が運営している小学生から高校生までを対象とした放課後等デイサービス事業所が1ヶ所あるが、親と子が一緒に通い、療育を受ける子ども発達支援センターとは異なる。Y市の子ども発達支援センターは就学前を対象としているため、就学後に療育を受けられる場所はC市（政令指令都市）やB市（中核市）の療育センターや病院である。Y市からの移動時間が2・3時間に増え、通う頻度も3ヶ月に1回などに減るため、「不安や悩み・困りごと」で整理したように、就学後のフォローに対する不安が生じていた。Y市の子ども発達支援センターに通う頻度は19例のうち、17名が「週1回」である。残りの2名が「月2－3回」であった。現在はY市の子ども発達支援センターに通うことで、継続的に療育を受けられる状況であるが、就学後に継続的に療育を受けることは難しい。現在、Y市の子ども発達支援センターに通う際にも、仕事や家事などの時間の調整での大変さや近場に無いことでの移動にかかる時間や費用の負担が述べられていた。

第3に、急な預け先がないことである。「意見や要望」でも整理したように、仕事をしていたり、どうしてもこの日出かけたいという時や、急に熱を出した時などで幼稚園では預かってくれない時に短時間でも見てくれるところがあると良いというものである。予約しないと使えないものではなく、何かあった場合に、すぐに子どもを見てくれる場所が求められていた。

第4に、子育て支援センターやサークル、ひろばの利用についてである。子育て支援センターやサークル、ひろばを利用することで、友人ができた場合があった。一方で、子どもが集団行動を苦手としている場合や子どもが他の子のおもちゃを取ってしまう場合、集団の中に入るのが苦手な親子にとっては利用しづらいものになっていた。例

えば、すでに仲良いグループの輪ができていて入りづらいなどの意見もあった。

（2）インフォーマルな資源とのかかわり

ここでは、インフォーマルな資源が子育て生活にどのように関わっているのかについてまとめる。

自身や配偶者が子どもの世話をできない時に、自身や配偶者の実家からのサポートを受けていた。特に、実家がY市内やその近隣の町などの比較的移動可能な近くにあることで、サポートを受けやすいという状況があった。一方で、子どもの特性や親が働いていることで預けられない場合には、一緒に連れて行くか、なるべく夫妻のどちらか､主として女性が子どもを見るようにしていた。実家に預ける場合にも、移動時間がかかるため、事前に電話で預けることができるか否かを確認している事例や実家の親が働いていることで、なるべく自分で見るように専業主婦になった事例、療育に通う間は仕事ができないと言う事例があった。

実家が近くにあることで、サポートが得られていた。一方で、本調査では､「自身や配偶者が世話をできない時に子どもの世話を頼む相手」で整理したように、子どもの特性によって預けられない場合があった。このように、子どもの特性に加え、本人がもつ社会関係や利用できるサービスの質と量によって、家族内で誰がどのように子どもを見るのかが規定されていた。

（3）本人がもつ意識

ここでは、本人が持つ意識が家事や育児などの配分どのように関わっているのかについて結果をまとめる、

第1に、家事や育児などの役割や子ども発達支援センターに一緒に通うことについては、主に女性が中心的な役割を果たしていた。ケア役割に従事している女性の多くが専業主婦やパートなどの短時間労働であり、男性が主に稼ぎ手としての役割を果たしていた。家事や育児の配分をめぐっては、夫妻が持つ家事や育児が女性の役割という性別役割意識や時間資源、子どもの特性（母親にしかさせない等）によって規定されていた。

第2に､子どもに少し手がかかる状態である(追加的なケアが増す）ため、家事や育児などの役割が女性のみに集中する構造は、一般的な家事や育児の分担よりも女性の負担が大きい。第3に、3章の1節や3節で整理をしたように、女性が専業主婦のケースにおいて、男性が「家のこと＝女性の役割」といった規範意識や性役割意識が強く、子どもの障害や子育ての大変さに対して理解がない場合には、子どもと父親との間、夫妻間で「パワーの問題」が生じている場合があった。

以上のように、重度の障がいとは異なり、子どもの特性が見えにくい分、発達の不安や、それに伴う困難さが家族の中で共有されない・十分に話す時間を持てていない場合には女性の負担が大きいことが推察できる。

（北海道大学大学院教育学院・博士後期課程）